大相模（旧・見田方村）・

八坂神社裏の「オイテケ堀」伝説

― 本来の伝説は白蛇伝説 ―

天明六年（一七八六）の関東大洪水の時に、元荒川の堤防の決壊によってできた大きな沼があった。ここ見田方村から隣の東方村にかけて広がる沼であった。その大沼の名残が最近まであった「オイテケ堀」伝説が残る八坂神社裏の内池（うちいけ）である。夕方から夜にかけてこの池のそばを通ると、その池のあたりから「置いてけ、置いてけ」と不気味な声が聞こえてくるので、手にしている物を置いて走り去ったという。

また、この沼（内池）にはもう一つの伝説がある（昭和十四年、中村徳二郎著「大相模郷土史」冊子）。

この池の主はかなり大きな白蛇で、たまに通りかかる人を池の中に引き込んでは、池の底に身を隠していたのであった。そこで地元の人々は、ここに水神宮と弁天を祀ることにした。すると、いつしか白蛇は出現することはなくなったという「白蛇」伝説である。これが内池に残る本来の伝説であろう。

白蛇伝説については、大成町六－四五〇－一の宇田春吉氏（大正十五年の生）の談によると、次のような言い伝えもあるという。

ある日のこと。この沼で釣りをしていると、小さな蛇が池より出て来て足元に近寄る。いざ帰ろうとすると、足が重くなり動けない。そこに侍が通りかかる。釣り人は助けを求める。侍は「目が大きな蛇だ、きっと相当大きな蛇に違いない」と言うや否や切りつける。蛇は本性を現し、大蛇となって池の中に逃げる。

江戸時代に元荒川の氾濫によって土手堤の内側（河川敷とは反対側）にできた「押堀（おっぽり）」は、現在は埋め立てられて弁天様が祀られた祠があるのみで、内池の名残は全く無く残念ながら大きく変貌した。

（文責　加藤幸一）